

Obituary

大場秀章：金井弘夫博士を悼む

東京大学総合研究博物館植物部門

Hideaki OHBA: In Memory of Dr. Hiroo KANAI

Department of Botany, the University Museum, The University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 JAPAN

E-mail: ohbahideaki@gmail.com

コロナ感染症が蔓延する直前、数度金井先生（以下、金井さんと呼ばせていただく）をご自宅にお訪ねした。歩行が次第に難しくなった奥様の介護が欠かせなくなり、金井さんも自宅で過ごすことが多くなっていた。何度かご自宅にお邪魔し、雑談した。多摩霊園は、金井さんのご自宅からは至近の処にあり、最後にお訪ねした2018年9月17日には散歩を兼ねて霊園内を歩いた。霊園には恩師、原寛先生のお墓があり、また同じ分類研究室の先輩でもある山崎敬先生も納骨されている。2時間ほどは歩いたのだろうか。初めは歩くのが辛そうなど様子だったが、次第にご自身から率先して色々な方々の墓石に足を向け歩かれてたのでほっとしたことが鮮明に思い浮かぶ。

金井さんは、植物分類学を専門とするが、新しい分類群の提唱や新植物の命名についての論著はほとんど発表されなかった。金井さんが命名者になっている学名で私が知るのはネパールのスイセイジュ（水青樹）に恩師の原寛先生と共に命名された *Tetracentron sinense* Oliv. var. *himalense* H.Hara & Kanai とカイコバイモ *Fritillaria japonica* Miq. f. *alba* H.Hara & Kanai だけである。こうしたことから金井さんを分類（学）に興味がない研究者だという人も少なくないが、決してそんなことはない。

分類群の提唱や命名を含め、論文や報告書を書くにはその必然性の根拠として当該分類群などの研究史を提示することが求められる。そのために必要な情報の一部を扱った *International Plant Names Index* (IPNI) などの出版物やデータベースなどが刊行されている。金井さんは修士課程（1954–1956年）で、「愛鷹山の植物」を研究した。研究では

愛鷹山に産するすべての高等植物の一覧をまとめ、全種または一部の種を対象に地理分布を解析した。大井次三郎著『日本植物誌』（1953年）が刊行された直後であり、また当時は地方植物誌の刊行も限られ、東京大学等に収蔵される標本も限定的であった。コンピューターは無論、機能的なコピー機も皆無であり、そうしたなかで個々の種の分布を具体的に明らかにするのは至難な状況にあった。一例を挙げれば、金井さんは、産地が掲載された同好会誌を含む印刷物を種毎に切り取り、一覧に貼り付けるなどしてデータ集を作成したのだった。

この時の苦勞が、データベース作成に注力する後の金井さんを生む契機になったと、私は思う。コンピューターやコピー機などの発展を受けて、金井さんは標本から分布図を作成するのに欠かせない、ネパールを含む種々の地名索引、植物分類学文献目録などを刊行した。また、データベース化で派生した普通植物の県別分布や植物誌作成に関わる資料密度の調査等にも取り組んだ。

一方、金井さんが在学・在職した当時、植物分類学は大きな変革期を迎えていたといえる。例えば、種の変異性の掌握では従来から重きを置いてきた外部形態の変異性に加え、地理学・生態学上の特性、さらには染色体数や核型解析による集団間の遺伝的変異性の存在などが考察できるようになり、これを受けて分類学においても従来とは異なる多様な研究法が生まれ、議論の活性化がもたらされた。しかし金井さんは新たに登場した解析法を採り入れた分類群の研究には関心を示さなかった。その理由は定かではないが、金井さんにはそれなりの確たる信念があったのにちがいない。

金井さんは、1958年3月に東京大学大学院を中

退し、同年4月に同大理学部助手に採用された。その翌々年の1960年に、指導教官の原寛教授が主宰する東京大学インド植物調査隊員として、インドのシッキム（当時は独立国）に植物調査に出かけた。この時に得た知見などにより、1962年に「日本ヒマラヤ要素の植物地理学的観察」のテーマで理学博士の学位を取得された。ヒマラヤにはその後も1963、1967、1972、1977、1983年に現地調査に出かけられた。さらに、1969年2月から1971年3月まで、コロンボプラン専門家としてネパールに派遣されている。その後も日本におけるヒマラヤとその植物のエキスパートとして、学会のみならず社会的にも活躍された。

1972年12月に国立科学博物館植物研究部に異動になり、同館が行っていたバブアニューギニアでの隠花植物調査にも参加された。加えて国内での野外調査も広範囲に及ぶが、注目されるのは第

二次・第三次尾瀬ヶ原総合学術調査で行った、池塘分布の綿密な経時変化の調査であろう。

金井さんの『日本地名索引』や『日本植物分類学文献総目録』を出版したアブック社の厚意で、2008年に『金井弘夫著作集』が刊行されることになった。私はその編集に携わったが、刊行後に金井さんからいただいた葉書で、(著作集に収載した)「ネパール通信」は、「私があちらでどんな生活をしたかの記録でして、どなたもご存知ないことなので、無理をして入れていただいたおかげで、皆さまにお話しできることはうれしいです」、との言葉をいただいた。

旧世代の植物分類学者といってしまうとそれまでだが、人間性に密着した学問の実践者として、金井さんは稀有な存在であったと思う。その思いは今も続いている。

Obituary

Keshab Raj RAJBHANDARI: Botanical Tours of Dr. Hiroo KANAI in Nepal

G.P.O. Box 9446, Kathmandu, NEPAL

K.R.Rajbhandari: 金井弘夫博士のネパール植物調査

カトマンズ, ネパール

E-mail: krrajbhandari@yahoo.com

It is sad news that Dr. Hiroo Kanai, well-known Japanese botanist and a good friend of Nepal, has passed away on February 28th, 2022. He loved Nepal and the Nepalese very much. He started his botanical tour of Nepal in 1963 when Professor Hiroshi Hara of The University of Tokyo organized the second botanical expedition to eastern Nepal. The University (with Dr. Kanai in the team) again organized botanical expedition to the area including Nepal in May 1967, 1969 and 1972. The collected specimens amounted to about 60000. Dr. Hara and his colleagues identified them and the results of collections were

published in ‘The Flora of Eastern Himalaya’ and its second report edited by H.Hara (The University of Tokyo 1966, 1971) and ‘*Flora of Eastern Himalaya Third Report*’ edited by H.Ohashi (The University of Tokyo 1975). Dr. Kanai contributed relationships of plants between Himalaya and Japan (Kanai 1966a, b).

In February 1969 Dr. Kanai joined the Department of Medicinal Plants as a Colombo Plan advisor for two years, to cooperate with the botanical surveys of Nepal and further develop the National Herbarium of the Department. During his stay in Kathmandu his family